

# 1968年とは どのような時代だったのか

小熊 英一著

1968 上・下

△上▽若者たちの叛乱とその背景

△下▽叛乱の終焉とその遺産

1968年、私はまだ生まれてはいない。

「政治」は自分たちにとって「禁じられている」ものだという意識が漠然とあった。「若者が政治なんかに興味を持つとロクなことになる」というような拒絶の空気が、そしてとにかくお前らは「消費」だけをしていればいいのだ、と口を塞がれ、思考を中断させられるような日常的な作法。

一方、「あの時代」について語られる言葉は、ずっと不親切だった。私の親と同世代の「元当事者」たちは、時に難解な専門用語を駆使しながら嬉々として「あの時代」を語る。しか

「あの時代」を語る。しか

たり、機動隊と衝突したり、東大に立て籠ったり、バリケード封鎖したり、とにかく「大人」や「社会」や「世界」に異議申し立てをした／＼してきた時代。

初めて「あの時代」の映像をテレビで見た時の衝撃はよく覚えている。どこまでも続くデモ隊の列と、声を震わして演説する若者、

## 今の若者と同じ苦悩

「生」に対するあまりにも真摯な問い

雨宮 処 凛

私たちは「特別な時代」を生きた。それは「経験した者にしかわからない」種類のものなのだ、という意識が垣間見えた。そして決まってきた。「遠い目」になる「元当事者」たちの横顔を見ながら、少し前の「若者」たちが、この国で、ほんの一瞬でも「世界を愛えられる」と錯覚できた時代。彼らの異様なほど生き生きとした表情に、私は嫉妬に似た感情を抱き、そうしてひどく打ち

のめされた。翻って自分と、自分が生きていた90年代の日本を見渡して愕然とした。世の中はあの頃以上に矛盾に溢れ、不正義がまかり通っているというのに、周りの若者たちは誰一人として「怒って」なんかいないのだ。私は自分の「正義感」を思う存分行使してみたかった。世界の不正や不平等に對して、何もせず黙っていることが罪のように思えた。だけど、そんなことを

思ったび、多くの「同志」と闘うことができた「あの時代」の若者たちに対して、憧れとも羨ましさとも嫉妬の姿があった。「ベトナム戦争反対」などの大文字ではないところに、今の若者と同じ苦悩があった。そしてそんな「匂い」を嗅ぎとっていたからこそ、私は「あの時代」の若者たちにシンパシーを感じていたのではないかと、気付かされた。

元当事者たちは、「あの時代」がこういった文脈で語られることに、どんな反応を示すのだろうか。しかし、著者が書くように、私たちに「彼らを笑う資格はない」のだ。

若い「彼ら」の「生」に対するあまりにも真摯な問いに、私は何度も涙ぐんだ。(あまみや・かりん氏「作家」)  
★おぐま・えいじ氏は慶應義塾大学教員・歴史社会学専攻。東太大学院博士課程修了。著書に「単一族神話の起源」「八日本人」の境界」「インド日記」「人民主」と愛国」「清水幾太郎」「市民と武装」「日本という国」など。一九六二(昭和37)年生。



1968 [上]  
A5判・㊥1091頁・㊦1011頁  
各7140円 新曜社  
㊧978-4-7885-1163-7  
㊨978-4-7885-1164-4